白き日旅立てば不死（ふし）

荒巻義雄

白き日旅立てば不死（ふし）

荒巻義雄（あらまきよしお）

角川文庫 4632

昭和五十五年七月二十日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——大谷製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-146803-0946(0)

白き日旅立てば不死（ふし）

荒巻義雄

角川文庫 4632

目次

第一章　森の街の記憶　九

1　覚醒（かくせい）　一〇

2　街影　一九

3　旅立　二八

4　放浪　四〇

5　出会　五一

第二章　虚なる勝利　六七

6　純子　六八

7　幻都　八一

8　取引　九三

9　敗北　一〇六

10　暗合　一二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章　憂鬱なる季節　一二九
11 傷心　一三〇
12 孤独　一四一
13 追憶　一五二
14 友人　一六二
15 聖堂　一七五
第四章　陽光の寛解　一八七
16 手紙　一八八
17 再会　一九九
18 原稿　二一一
19 電話　二二二
20 迷路　二三五
第五章　裁かれし者　二四三
21 仕事　二四四
22 彷徨　二五六

23 夜宴 二七〇
24 審判 二八〇
25 対話 二九三
参考・白樹直哉の主要経路――創作ノートより―― 三〇一
あとがきに代えて 三〇四
解説 波津博明 三〇八

人間は、どこへいっても、祈ることと愛することを、やめるわけにはいかない。
これこそ、すべての物語（ロマン）の基礎である。

――マルキ・ド・サド

第一章　森の街の記憶

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 覚醒

狂暴のあとに小康があった。

白樹は白い部屋にいた。四角な窓がある。鉄格子。夏の空。光る高層雲。

白樹は夏の匂いをかぎつけていた。青く無窮の空だ。澄んだ夏空は混沌とした記憶の世界へつながっていた。が、ばらばらな写真だ。記憶の中の原風景。ある街、ある平原。ある海原。大部分の記憶は、露出を誤ったフィルムのようにハレーションをおこしていた。何も映っていない真黒な部分もあった。

白樹のまだ覚めきらぬ視線は、狂気を宿しつつ夏空の彼方にむけられていた。記憶のフィルムは空しく空転しつづける。白い時間がつづく。白樹は鉄格子をゆさぶった。「くそッ！」額を叩きつけるたびに、皮膚がさけ、血が視界ににじんだ。「くそッ！」

怒号をききつけて、白衣の男たちがとびこんでくる。「鎮静剤をッ」注射器が白樹の腕につきたてられた。白樹はふたたび闇の国へ墜ちていった。記憶はその国に閉じこめられている。

「拘束衣を着せましょうか」

「いいえ、その必要はないわ。それより傷の手当を……」と澄んだ声がいう。三〇歳ぐらいの

小柄な軀(からだ)つきの女医である。てきぱきと指図をして、手早く血だらけの顔を消毒した。包帯を巻きおわると、ベッドの上に寝かせた。「じゃあ」と男たちはいいおいて出ていった。彼女だけが病室にのこった。

静かな午後の病棟。郊外電車のすぎていく響きがときどききこえてくる。

女医は、一脚きりの椅子(いす)をベッドのわきに引きよせ、患者を見守るようにして坐(すわ)っている。品のある端整な横顔が白く冴(さ)え、憂いの翳(かげ)を宿らせていた。

眠っている白樹の顔は、深い苦悩を滲(にじ)ませていた。彼女は、長い時間、彫像のようにじっとしていた。瞳(ひとみ)は複雑な感情を宿しつつ彼の面にそそがれていた。何を考えているのか。いつしか西陽さえかげっていた。……

「西村先生。院長先生がお呼びです。西村先生ッ……」

「あッ。はーい」

愛くるしい看護婦がやってきて、用事を告げるまで、時のたつことを女医は忘れていた。

「ごめんなさい。少し疲れちゃって、ぼんやりしていたの」

「院長先生のところに、お客様がいらっしてます」

「そう、誰かしら。すぐ参ります」

女医は椅子をうしろへずらした。白衣のポケットからハンカチを出すと、白樹の上にかがみこんで浮き出た汗をぬぐった。それから、足音をしのばせて部屋を出る。鉄格子の扉がかちんと締められた。特別病棟の長い廊下を足音が遠のいていく。廊下のつき当たりで建物が切れて、構内

がつづく。作業療法用の畠があり、周囲を夏草がおい繁っている。四角に切りとられた夏の空。北国の空は澄んでいた。

女医の足音が絶えたとき、白樹は目をあけた。記憶の断片。白樹は、不意にその冬を思いだしていた。

彼女のいた椅子にはまだぬくもりが残っていた。彼女の姓は西村……。この北国の小さな私立病院の医師だという。《おかしなことだ。彼女は西田冴子のはずだ。おれの記憶にあるあの女性とあまりによく似ている》と彼は考えていた。

ちかごろ、彼女はよくやってきて、長いこと喋(しゃべ)っていく。白樹が〝密偵マレー〟と名づけた年とった方の医師は、姿をみせなかった。見習医師の〝クレマン〟もだ。相手にされないとわかったらしかった。《やつらはぐるなのだ。あの闇の国から派遣されてきた……》

白樹はとうに意識を回復していて、眠っているふりをしながら、そこに坐っていた彼女をじっと観察しつづけていたのだった。短い白衣をつけた彼女は、確かに医師だったが、白衣の内側にあるものは西田冴子にまちがいなかった。あの、冬のパリでの交渉で、白樹はその軀をしっかりと記憶していた。彼女は一見ひどく冷静な女のようにみえた。何か、彼を本能的に嫌(きら)っているようにさえみえながら、そのくせ彼を拒みはしなかった。白樹は、彼女の白い軀のすみずみまでもしっかり覚えていた。堅い乳房や細っそりした腰やそのカーヴなど。よく締った太腿(ふともも)のつけねのところに大きなほくろがあった。

今日、あの女医は、麻地の白いミニスカートをつけていた。見覚えのある脚が形よく組まれてきれいな線を描いていたが、その脚はスカートの中の暗がりの中に消えており、太腿の証拠を確かめるすべはなかった。

いつもは、記憶そっくりの声で彼と色々な雑談をかわしていく。遠まわしに何かをきき出そうとしているような気がした。彼女は彼のあの部分のことを知りたがっているのだ。彼の過去のあの白い部分の秘密を。核心にちかづいてくると、白樹は、本能的に口をつぐむ。自分でもわからない理由で、彼は拒んだ。

あのパリでの西田冴子もやはりあの女医と同じだった。その部分を問われると、白樹はきまって同じ反応を示したのだ。そしてスリップ一枚になって、まるで何かの供物にささげられているようにじっとしている白い軀を、白樹は無理にも燃えあがらせようと逆に意地になるのだった。彼女は、白樹のいいなりで、彼の要求する加虐的な体位さえも拒まず、軀の中で青く燃えているような情感をのみこもうとして、歯を噛みしめていた。彼は、さらに追いあげるように唇を這わせる。やがて冴子は、低く彼を呼ぶ。叫びは切れ切れのリズムに変わる。が、それも急に止む。平静がもどり、組みしかれていた裸身が彼をおしのける。白樹の視線を避けるように顔をそむけ、床の上に立つと、まくれあがったスリップの裾をなおし、ストッキングをつける。ハンドバッグをあけ、鏡にむかって顔と髪を直す。ドレスをつけ、靴をはき、外套を着ると、影のように無言で部屋を出ていく。

《あの部屋は、パリのいったいどこだったのだろうか》侘しいペンションの一室。空漠とした

虚脱感が、白樹を支配する。

《ああ、そうだ。おれは、あのときヘルダーリンの詩集を持っていた》白樹は、記憶の世界で、トランクの底をかきまわしていた。一冊の薄っぺらな廉価本。それをとりだして白樹は拡げている。何個所かに自分の引いた横線が記入されていた。白樹は、枕スタンドのあかりでその独文を読んでいた。あのときすでに、《精神の底でおれは狂いはじめているのだ》というかすかな反省があった……。そして、……

《思いだせない、その先は……》

白樹は、また、ハレーションをおこしたフィルムの空転をみている。……

と、ふたたび。……《そうか。おれは、あのあと、バルセロナへ行ったはずだ》

さむく雨がちなパリを逃がれて陽光の南スペインへ……。地中海に面する港街へ。白樹のフィルムはまたとぎれとぎれに回りはじめていた。

《おれにとって、その国は、現実よりももっと美しかった。マドリッドからバルセロナへの長距離夜行列車は、岩がちの丘陵地帯を夜のうちに走りすぎ、目覚めたときは地中海にそって走っていた。乗客たちはぽつぽつ降りる支度をはじめていた。ふたたび海を離れた列車は大きな都会の広がりへむかって進んでいた。その真中に、おれのよく知っていなければならない尖塔(せんとう)がみえた。サグラダ・ファーミリア寺院、ガウディの作品だ。やがて列車は長いトンネルに入った。その途中で汽車はとまった。おれは、トランクをさげて、他の乗客たちのあとにつづいた。改札口を通りぬけ、長い地下道に出た。それは、おれの予想していたような駅ではなかった。階段を昇

った。と、おれはビルの立ち並ぶ大通りの前に立っていた。下車駅を間違えたのだろうか、とおれは一瞬、疑っていた。それから自分にいいきかせた。これは、間違いなくバルセロナであると。なぜなら、あの写真でよく知っているガウディの設計した異様な寺院のあるのは、この街以外ではなかったから。馬鹿げた疑惑だったが、言葉の通じない外国ではよくあることだった。おれは、車の流れを目安にぶらぶらあるきはじめた。まもなくおれはグリンベルトのある大きな通りに出ていた。日曜日のためなのか、大きな噴水のまわりに市民たちが集まっていた。港街のせいか街には活気がみなぎっていた。おれは、それから、小公園のベンチに腰をおろして、その日の予定を考えていた。いや、そのはずだ……》

また、記憶はとぎれている。

《本当にあの街はバルセロナだったのだろうか。ハンブルグだったかもしれないし、マルセイユなのかもしれない。絵葉書でみた他の外国の港街だったのかもしれない》

断片的な光景は、光り輝いて鮮明だったが、映画の中の風景のようにも思えるのだった。白樹はまたやり直す。《もう一度、パリへもどろう。パリ。シャンゼリゼ通。スズカケの樹。おれは、パリの夏にもいたのだろうか。おれは、スズカケの街路樹が葉を繁らせていたパリから、ニースへ入ったのだろうか》

白樹の記憶は、ぼんやりとしていた。〝ル・ミストラル〟それとも〝レギュール〟だったろうか……。たしか……アビニオン、カンヌ、そしてニース。記憶のフィルムは、加能純子のいたニースにつながっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com